



それ自体はたった三日間の出来事だった。四十キロメートルの距離にそれ以上の時間を掛けることは不可能だった。しかしそれは実質、彼の一生で一番長い三日間であり、その瞬間だけが彼が本当に生きた時間だった。

初めての旅だった。といっても、国道を北に真っ直ぐに昇っていただけだったが、彼にとっては充分長かった。九ヶ月の間ほとんど体を動かしておらず、移動することがどういうことかも忘れてしまっていたのだから。

両足と腹に包帯を巻き、指と手足首にはテーピングをして筋肉を締め付けた。こうすると体が動くような気がした。綿の手袋の上に、重ねて革の手袋をつけた。マスク、マフラーで顔を包み、コートを羽織って、ヘルメットを被る。エンジンを掛ける音を誰にも聞かれたくなかったので、だだっぴろい国道に出るまで歩道を歩いてバイクを運んだ。エンジンは冷え切っていて、発進するまでに二十分もかかった。一度走り出すと、何も考えずにいることができた。ガソリンは充分あった。到着するまで、一度もスタンドに寄らなかった。初めから終りまで、何度も追い抜きされながら走った。時速六十キロメートルを超えて走ることはなかった。

昼間は交通量が多く、事故を起こすのが恐かったので、走るのは午前零時を過ぎてからと決めていた。深夜の国道は空いていて、快適だった。寒さで筋肉が固まり、手足が麻痺してくると、停止して包帯をまき直し、テープを付け替えた。仮眠は、セルフサービス式・無人スタンドの、暖房の効いた休憩所をとった。国道には、車両用にも、人間用にも、ガソリンスタンドは山ほどあるので、必需品を得るために脇道にそれる必要はなかった。ただ、まっすぐ走ってさえいればよかった。左折も右折もする必要はなかった。信号が止まれと命令したら止まって、走ってよいですよと許可したら、それに従う。それを繰り返すだけでよい。それだけで、ほとんど終りなのだ。道路に出さえすれば、自動的に目的地へ向かうようになっている。走り出した時点で、到達点は決定されている。体は勝手に動く。一度始めさえすれば、後は楽なのだ。もっとも、始めるまでに途方もない手間と時間がかかったから、結局苦しい思いを引きずるのだが。

とにかく、彼は走りだしてしまった。もう戻れない。彼を止めるものはもう何もない。彼は既に、死んだも同然のところまで自分を貶めた。すると、再び動き出すことができた。しかし、たぶんこれが最後だろう。もう細かい選択に迷うこともない。後はただ、アクセルを開き、ブレーキをかける、これの繰り返しだけだ。一度コツを覚えてしまえば簡単だ。考えずとも自然に反応する。指令は三種類しかない。しかも大抵の場合はその内の二種類しか示されない。目的の地点の目印が見えるまで、ぼーっとしてられる。休憩は昼間、道路が騒がしい間ずっとだ。夜までぶらぶらしていればよい。

最初の夜。ついに国道十七号を上り始める。予想通り、どんなに防寒したつもりでも、風は衣服の隙間を通して肌を突き刺してくる。一時間が限界だった。慣れない者にとって、真冬の深夜にバイクに乗るのは拷問でしかない。しかし彼は進んで拷問を受けに行った。その日は秋葉原までで止めることにした。神田川にかかる橋の上にある、汚い公衆便所で用を足した。チョコレートを食べて血糖値を上げ、漫画喫茶に入った。ソファの柔らかさと室内の暖かさは忘れられない。あまりの心地よさに、あの思考の連鎖まで一時的に停止した。それでも四時間しか眠れなかった。目が覚めたとき、陽はまだ昇ったばかりで、退室までは三時間もあった。そこでまた思考は連鎖し始めた。

彼は、もっとも古い記憶まで遡ろうとしている。精神的な意味での帰郷。自分の内部を掘り進み、時の流れに逆らって、もう一度自分の生をやり直し、再解釈しようとする。そこに物語を発見しようとする。劇的な何かを、感情の爆発を、二度と体験できない大切な思いを探る。

しかし、彼の情感はだいぶ前に破損しているので、何も起らなかったということしか思い出せない。だから無理矢理な理屈と説明を付け足す。多くの人が他人の異常行動を説明しようとするときする、虚しい作業だ。それを、自分に対してもするだけだ。まず事実を並べる。考察する。分析する。結論する。事件が終わったら次へ進む。いや、遡る。そうやって、一つの人物像を組み立てる。それが自分自身だという感覚は既にはない。厳しい客観的な態度で、彼はこの不安定な性格を観察する。最後まで辿ったらどうなる？いや、正しくは「最初」まで。

彼は不気味なほど冷静だ。それは表情からも読み取れる。一つ一つの部分は整った形をしていて、全てが有機的に組み合わさって自然な表情を形成することができる。にもかかわらず、生きた人間として見るときその表情は無機質なものであった。その顔は、間近で体面したとしても、間に何か挟んでいるような、作った表情を予め濾過してしまうような、無限の時間と距離を纏っているような、写真的な、まったく絵画的な、過去の像としか思えなかった。まず目。丸い大きな瞳は顔面筋肉の収縮に隠れたりはない。常に突き刺すような冷ややかな視線を送っている。鼻は立体的で、人間の顔に装着しうる限りの完全な三角錐と言ってよい。桃色の唇などはまさに女性のそれである。それぞれの部分は人間に普通な感情を語っているにも拘わらず、その顔一面は容易に直視し得ぬ空白に染められている。血が通うというのは、むろん心臓があるからであるが、だとしたらこの男の心臓はどこにあるのだろう。机の引き出しの中にでも忘れてきてしまったのだろうか。大事なものは鉛筆と教科書、辞書、財布。つまりは体面よく見せるために運ぶものだけだ。彼の中には何もない。

断ることに快感を覚える型の人間と、引き受けることに快感を覚える型の人間。彼は明らかに後者であった。やれと言われれば、彼はなんでもやった。またやらなければならないと理不尽に強制されるあらゆる義務も、文句一つ言わずやった。だから当然のことながら、彼は優等生だった。素行は良好、素直で勤勉、やや積極性に欠けるが、生活上問題行動は一切なし。周囲の人間は、彼について何を心配していいのかわからなかった。それは信用というよりは、無関心と怠慢だった。友だちは彼を放っておくことが義務なのだと考えた。で、彼は人と深く関わるができなかった。

だからいつも、なんとなく時間は過ぎた。義務、お使い、手伝い、暇つぶし。彼の活動は全てこのどれかに分類された。彼自身の意志はどこにもなかった。彼は、自分には自意識というものが欠如しているな、と思った。そう思うこと自体、既に過剰な自意識の芽生えを証明するものであるが、そのことは懸命に否定し続けた。家庭にも学校にも社会にも、そうすることが義務のように思われる雰囲気が溢れていた。枠からはみ出すことは、人に迷惑と心配をかけることであるから、年頃の若者たちの間で流行る危険なじゃれあいや大胆な反発に参加することは、天地が裂けてもできなかった。それに自分がどうあがいたところで、圧倒的な力によって、元の枠に押し込められることを彼は知っていた。青春をすり減らす仕組みを変えることなどできぬものと、親、先生、その他大勢の大人たちにさんざん仕込まれた。彼は大人しく従った。ほとんど真剣に考えもせず、自分のために周囲の人間の心を煩わすことが何よりの悪なのだ と断定した。そして、常に控えめで、自己主張せず、ただばか正直に振る舞っていることが正しいと思い込んだ。そこそこの良い成績と無難な評判だけが彼らを喜ばすものだと決め、以後その確保のみを自分の行動原理とした。それ以外の役目は、自分にはないと考えた。

そんな風に思ってしまうのは、異常なまでの劣等感のせいだった。彼は体が弱かった。肩幅は狭くて、足は短く、小さかった。手は女性のようにほっそりして骨張っていた。肌も女の子のように白くて、日焼けしてもすぐに元の白さに戻った。声は低くかぼそく、よほど勇気を出して力を込めて話さなければ、相手に聞き返されないことはなかった。自分はいつもそこにいないような気がしていた。それがそのうち、自分はそこにいてはいけないうような気になって、いつの間にか自分の存在は完全に迷惑でしかない と確信した。通信簿の数字と雑事万能の能力は、その迷惑をかりうじて減ずることのできるものだった。何でもできるというのは、それだけ頭が空っぽだということなのだから、と考えると辻褄も合って納得した。

一体彼は、自分は何で生きているのだろうと、真剣に考えることさえしなかった。ともすれば似たような答えを聞かされるこういう類の問答は、もっぱら人任せにした。先生や、父親や、空気を売りにしている友だちや、テレビや新聞の中で有名人が語る場所に抛れば、大体誰の人生もすばらしく価値あるものだということだった。で、それは疑わなかった。といっても、自分の中でそのことを証明できたわけではなかった。自分の頭の中ではなく、他人の頭の中で生きていた。誰かの目に触れるとき、そう期待されるであろう行動以外は、何もしなかった。だから誰も見ていないときに、何をしてもよいかわからなかった。無駄に時間を過ごすことは気持ちよかった。けれども、自分が自由だという気はしなかった。人に会うまでの準備作業—勉強、趣味、読書、アルバイト—は、始めるともう、それ以外何もしないでよい気になって楽だった。今日の予定と明日の予定との間をつなぐ接着剤は、そこら中にいくらでもあった。それにしても、そういった無為な生活だって、先ほどの偉大なる人生の先輩たちの話では、必ず何か意味のあるものらしかった。それは、強制されるあらゆる義務、規則、困難、試験やお説教、誤解、偏見、いじめ、屁理屈、嘘などで窒息しそうな生活を、正当化し、反抗心を自制するのに役立った。自分の境遇の理不尽さや、世の不公平を強烈に意識して、まさに彼自身の思想と個性が根を伸ばそうとしていたとき、苦悩と不条理を一言のもとに平均化して切り捨てる社会的諸観念が、出過ぎようとする芽をむしりとった。

そういう風に生きているので、彼は当然の如く、自殺しようと思った。でも、やり方がよくわからなかった。飛び降りとか、首つりとか、練炭とか、色々聞いてはいるけども、具体的に想像することができなかった。鍵のかかった屋上に上るのも、適当な紐を見つけて吊すのも、炭を焼くのも、覚悟があればたやすいけれど、そのために一々行動するのが面倒だった。死ぬにしても、その前に何らかの苦しみを味わうのは嫌だった。できることなら、突然、何の前触れもなく、ふっと消えてしまいたかった。眠っている間に死んでいて、目が覚めなければよいと、毎晩思った。でもやっぱり朝は来た。

その内、完全にいなくなるにはどうすればよいかがあった。何も首を吊る必要はなかった。そういう類のことは、失敗したときに大騒ぎになる。自殺志願者は、死んだ後に家族や友だちがどう思うか、悲しんでくれるだろうか、いや、おれなんかいなくなって・・・とか無意味な想定をして慰めに浸ることがあるが、それは死ぬことに成功したらの話である。病的なほど慎重な彼の場合、失敗したときの可能性については考えることができた。で、リスクが高いので、そういうことはやめた。それで、死んだ人間になるには、完全無欠なお利口さんでいればよいのだと考えた。多くの人が日頃の鬱憤を爆発させる、内輪での悪口とか噂話とかひとときの悪人ごっこ、その他生活の節目節目に訪れる劇的な場面に対する感情的反応、喧嘩、仲直り、感傷、離別の悲しみなど、人間らしさを思わせるあらゆる要素を極力排除していけばよい、と考えた。他人に、ああこいつも人間なのだなあ、と思わせる行動を一切見せなければよい。他人にとっては、自分が生きていてもいなくても、大して重要はでないのだから。重要だとしても、彼の関係者の場合それは、学校の評判が下がるとか、年金を払ってくれなくなるとか、子孫が生まれなくなるとか、まめにまとまった試験対策ノートが手に入らなくなるとか、レポートを見せてもらえなくなるとか、食堂の行列に並んで昼飯のパンを買ってきてくれる人がいなくなるとか、漫画やゲームを借りパクできなくなるとか、定期券を貸してもらえなくなるとか、金を貸してもらえなくなるとかいう意味でしかないから、やっぱり大したことはなかった。だから、下手に自殺未遂でも起こした方が彼らの心に衝撃を与えてしまうというもの。それは迷惑行為だ。親や友達が怒ってくれるのは、自分を愛してくれているからだと思うのは、便利な慰めだ。実際は、ただ腹が立ったから彼らは怒るのだ。自殺でも事故死でも病死でも、死はそれ自体が残酷な悪意の象徴だと見なされている。それを引き寄せた人間は、有無を言わず悪であり迷惑者である。だからどんな方法にせよ死ぬことは賢くない。それに、死んだように生きる手段など、山ほどあるのだ。彼はその中の一つを選んだに過ぎなかった。そしてそれは、何も今になって彼だけが発明し、果敢に実行している行動というわけではなかった。意識的であれ無意識的であれ、彼の周りのほとんどの人間は似たような個性排除の手段をとっているように思われた。それに、こういった方法で無難な一生を過ごせるということは、既に家族や先輩たちが証明済みであった。

そう悟ってからは、個性を消すことが、何よりも大切なことだった。注目されることを恐れた。いつも中間的な位置を保持しようと努めた。他人から見て、自分がどれだけ取るに足らない存在であるかを、常に意識した。関係の進展は一切望まなかった。最底辺まで自分への評価を落とそうとも思ったが、それはそれで手間がかかるので、何もしなかった。幸いにも、だいたいの知人は彼のことを、「いい人」だと思っているらしかった。

彼は男性でも女性でもなかった。性別が男だというのは、ただ便利な分類でしかなかった。男、女という最も単純な分け方は、彼にとって全く意味はなかったが、しかし人間である以上はこのどちらかで通すしかないので、そのまま受け入れた。体が男性であることは、別に否定する必要もなかったし、心が女性であると主張するのも、色々と面倒な事態が発生することは予想できるので、そうする気も起らなかった。同性愛者というわけではない。また両性愛者という自覚もない。ただ、どちらでもないのだ。中性というもおぼろげで、彼をはっきり表す言葉ではない。むろん、儀礼的に、これは恋かもな、という切ない気持ちを味わうこともあった。女性の肉体への性的反応というものもあった。それには神経の興奮を鎮めるための作用があった。しかしそれ以上の意味はなかった。

だが人形のような彼をなんとか動かしたものを、恋の力だと考えるのは、もっともらしかった。それは個人への恋愛というよりも、集団への恋愛だった。対象を一人選ばなければならないという固定観念は煩わしかった。彼は理不尽な社会をそのままに受け入れ、その全てを愛した。彼が人を愛する時は、誰か一人を愛することはできなかった。家族、幼なじみ、ご近所さん、学校の友達からテレビの中の有名人まで、決まって全員を愛した。しかし同時に誰一人愛してはいなかった。自分というものがいないので、人を愛した時に跳ね返ってくる自己愛というものを目的として恋愛することができなかった。ただ、近くで空気を吸っても苦ではないと思える人間のそばにすることが、何より望ましいことだった。そういう人はたくさんいた。いつも誰かがいた。重要なのは見られていること、誰かが自分に気付いてくれているという事実なのだ。それだけでよかった。人に見られている時にだけ、自分は消え去ることができた。自分の思考から逃れることができた。とにかく一人ぼっち、または一緒にいて緊張してしまうような人間と一緒にいるのは、耐え難かった。彼は酸素を取り込んで二酸化炭素を吐き出す機械だった。彼はまさに食物生物が連鎖する過程で誤って生まれた一層でしかなかった。

しかしもちろん見られてはいけない行為があった。それは生物が最も隙を見せる瞬間、すなわち食事と睡眠である（排泄は言うまでもない）。全ての人間が共有する弱点を克服すれば、それだけで超越的な存在になることができると考えた。そして超越も死も彼にとっては同じようなものだった。彼は無理してでも「超越者」になろうとした。人の限界を超えるのではなく人の関係を超えるという存在としての。むろん食事と睡眠を不要にすることなどできるはずがない。肝心なのは見せないことだ。誰にも見られなければよい。あたかもそれらの生理機能を有していないかのように見せかける。そういう気配すら感じさせてはいけない。トイレに行くところは絶対に見せてはいけない。誰よりも遅く床につき、誰よりも早く目覚める。自分は機械であると、人形であると信じるのだ。一部の変態的な人を除けば、他人がものを食べているところや寝ているところを、そう詳しく想像することはしない。他人の頭の中で生きるのに、食事や睡眠の映像を提供する必要は特にない。彼もまた人間なのだ、という事実を確認させるのは、ほんのたまにでよいのだから。彼はあなたの中で、本を読んでいればよい。ものを書いておればよい。歩いてれば、走っていれば、仕事をしていればそれでよい。

少しずつ彼は戻っていく一出発する前の晩。三ヶ月の間何もしなかった。どこにも行かず、誰とも会わなかった。だがそんなことはどうでもいい。ぼくはもうどこにもいないのだ。なるほど、まだ役所に番号は登録されているだろう。迷惑業者は今日も百万円当選おめでとのメールを送りつけてくるだろう。だが、それだけだ。人間関係は全部終わってしまった。かなり手こずったが、友だちは全員、なくすことができた。もう誰もぼくを信用しない。誰もぼくを見てはいない。したがってこれ以上ぼくが何をして、誰かが失望することはもうない。なすがままに身を任せていたら、ああなったのだ。でも、結果的にはあれでよかったのかもしれない。きれいさっぱり忘れた、というほどではなくとも、誰も二度とぼくを思い出そうとはしないだろう。嫌われるのがあんなに簡単だとは知らなかった。とにかくもう、ぼくは誰の頭の中にもいない。もう誰にも心配かけないで済む。迷惑かけないで済む。計画は完了した。後の時間は完全に自由だ。

家族には、二週間に一回程度、PCメールの自動送信機能を利用して安全報告する仕掛けを作ったから、当分の間ばれることはない。携帯電話の料金は口座から自動で引き落とされることになっている。家賃の振り込みは親がやっているから、大家さんの訪問を受けることもない。そして、計画的に命を絶つ人の多くがやるような、あの入念な物理的身辺整理というのは、何もやっていない。部屋はそのままにしてある。誰にも思わせぶりの挨拶などしていない。このまま一年くらい会わなくなっても、何の問題もなく生きていると思われるに決まっているのだ。うまくいけばみんなおしまいまで気付かないかもしれない。それでいい。穏便に終わるに越したことはない。

完全に無所属になったわけではもちろんない。家族、日本、世界。この三つから脱することは、明らかにぼくの能力を超えているし、脱出に成功したところでそれほど意味はない。この三つに関しては、放って置いて構わない。元々それほど深く関わってはいなかったのだ。自分から積極的に動き出さない限り、向こうから干渉してくることはほとんどなかったのだ。そして積極的に動くことなど、生涯でただの一度も許されなかったのだ。

一ようやく発見した自分自身の意志がこのようなものだとは、悲しいことであろう。限界が来たのは約半年前、物心ついて以来続けてきた自製の反動で、彼はばかばかしい復讐を図るに至った。細々と積み上げてきた正直者の評判を、たった一日でぶち壊した。それまで根気よく、正常に生きているように見せかけることに神経をすり減らしてきたが、突然それが嫌になった。頭を壁にぶつけるのが習慣になると、さすがの彼も自分の悪い変化を周りの人に知らせようとした。反応はそれなりにあった。しかしそれは大抵、当たり障りのない慰めの言葉で終わった。彼はよくも悪くも、やはり信頼されていた。どうせすぐによくなるだろうと思われていたので、病院に任せておけば大丈夫だろうと思われていたので、誰も本当には彼を心配していなかった。彼にはそれがわかって、どういうわけかそれが腹立たしかった。それでもすぐに考え直した。それが普通であると考えた。また、信頼と無関心がそれほど本質を異にしないことを悟って自らを慰めた。そして、人間関係は信頼で成り立っているのだった。その考えはますます彼の精神を重く灰色にした。そのため彼は更なる慰めを求めた。解放を求める多くの人間がやるように、彼は本に頼って精神の暗黒を浄化しようとした。『車輪の下』という小説はよい避難所となった。問題はその物語が悲劇的に終わっていることだった。

真面目一辺倒の見せかけ根性に骨の髄まで犯されていた彼は、強い自己犠牲感に襲われ、発作的に、自分の全生涯を、一瞬で否定してしまった。それは、周りの人たちを気遣って、できるだけ迷惑をかけぬことを信条としてつましく固めてきたものだった。他人の頭の中で何事もなく生きることが、つまり完全なる死であることととりあえず仮定して、自殺とも自活とも言えぬ中途半端な生活に甘んじてきたことを恥じた。彼は自分の死を捏造したい思いに駆られた。やがて誘惑は決意となった。失踪というのは手軽そうだった。実際彼の携帯電話に登録されている人間の一人はこれをやって、学業も趣味も家族も友達も夢も思い出も一切を忘れ去って、冬枯れの寂しい二月の昼間に冷たくなって発見されたのだった。彼とは誕生日が一日違いだった。彼が所属していたバンドは数ヶ月の間活動を休止したが、その年の十一月には新しい仲間を補充して活動を再開していた。彼らはコンサートの度に亡くなった元メンバーのことを、感情を抑え込んでいるような、しかし深い情熱を秘めたような調子で話したので、彼らの演奏は重みを増した。

しかし彼にはそういう仲間はいなかった。彼はまったくひとりぼっちだった。それをネタに自虐的な話のできる相手すらいなかった。友だちを持ったことがないので、友だちがいなくなることがどういことかもよくわからなかった。それでも今まで彼を利用し、いじめ、慰め、褒めたたえ、かわいがり、一緒に歩いてくれた数人を友だちだと思うようにした。すると急に惨めな気持ちになって、寂しくなった。やがてそれは言い表しようのない怒りに変わった。激しい恋愛が激しい憎しみに変わるように、孤独は世界への無差別な怒りに変わった。それが、このような孤独を作り上げた世界への復讐という、何やら大義めいた愚考にまで発展した。その時の衝動で、彼は一時的に過激な犯罪者の気持ちになった。凶器を持って暴れ回ることを想像してみた。しかし気弱な彼は人を傷つけることを想像すると吐き気がした。そこで自分を傷つけることにしたのだった。自分で自分に苦痛を与えるという行為の無意味なことを感じると、心は落ち着いた。というのは、意味のないことに真剣になった試しがそれまでないからであつた。遅まきながら彼は、何だか正しくないことをしている、と思うことに喜びを感じつつあつた。そういう悪事は、一度癖がつくともう止まなかった。

病気を排除する強い意識によって彼は他人からも自分からも排除された。風呂場に出現する生物はどんな種類であれ殺されなければならぬように、他人にとって清潔な領域を侵すものとなった彼は、軽蔑と隔離の憂き目に会うことを免れなかった。救急車で運ばれるたびに激しい自己嫌悪を感じた。騒ぎを起こして人に迷惑をかけるということは、他人の仕業であれば全く無視することができるのに、自分がやったとなるもうたまらないのであった。隊員は彼の悪を証明した。彼はおぼろげに記憶している一行き倒れ、担架に担がれ、まぶしくて狭い部屋に運ばれたとき、救命を職とするものたちが自分の体に施した厳しく冷静なる処理によって一理解したのだ一横たわる自分は現代の病弊が生んだ異物であること、神経過敏に病んだ憂鬱病者であること、後戻りできぬところまで心を自閉してしまった哀れな敗残者であること。遠く呼びかける乱暴な声と、殴り、冷水を浴びせ、顔面を掴み揺らす手、ひんやりと被さる呼吸器。そうだ、まだ覚えている！腕の切り傷を見たとき、彼らの一人が、いや彼に続いて二人も三人も、こういった類の病人たちを全否定する暴言を吐いたことを！しかしそんなことはどうでもよいのだ。事実そうなのだし、彼らはぼくを助けてくれたのではないか。問題なのはそれによってぼくの抱く感情が、感謝よりも罪悪の方が強いということなのだ。

二時間経った。まだ二時間？しかしもう半年は戻っている。卒論指導の担当教授と面談をした日。栄養失調で倒れたあの日まで。栄養失調！外見的にはこれで万事解決ということになっているのだ。状況を何もかも知っているのはぼくだけで、ぼくはそれを誰にも話さない。心配をかけるからだ。心配とは迷惑だからだ。病院に運ばれたおかげで、知る必要のない病名まで知ってしまった。しかしそれで全ての説明がつくか？鬱だの不眠症だの拒食症だの摂食障害だの呼吸困難だの神経衰弱だの異常骨格だの、そういった名前を何やら不幸自慢のように並べ立てたところで何になる？なるほど、自分はそういう病気なんだと説明するのはもっともらしいかもしれない。しかし、結局のところ何でもないのだ。他人にとってはどうでもよいことなのだ。

それからごく自然に、外界との関わりは薄れていった。一度崩れてからは早かった。こういう時の周りの人たちの悟りの速さというのは尋常でない。倒れた瞬間、彼は今まで積み上げてきたものが一気に壊れゆくを感じたが、それは早とちりではなかった。取り返す術はもうなかった。彼には自分が他人の頭の中で死んでいくのが見えた。元々ちゃんと生きた像として記憶に残ってもいなかったろうが、ついに完全に消し去られていくを感じた。何らかの手続きのために出歩かなければならなかった時に、全ての視線が「あれ、おまえ死んだはずじゃ」と言っているのが聞こえた。それから「ひやひやさせやがって、やっぱり生きてるじゃねえか」とも聞こえた。たぶんそんなことは言っていないだろうことはさすがにわかる。でも、そんな風に思ってしまった。しかしそこで墮落は快樂の味がするとわかった。全ての人の頭の中から消え去ることができたのだと思うと、この上なく爽快だった。

倒れる前は？そうだ、その日、最後の食事をした。感慨深い思いは一切無かった。むしろこれで食事の苦しみから解放されるのかと思うと、気持ちが晴れ晴れした。これからは水とチョコレートだけあればいい。実際それから、一日の食事は水とチョコレートだけだった。一度そうなると、パンや米すらも内臓は受け入れなくなった。自分の食事を監視する人間が自分だけだということは、つまり監視を怠っても誰も咎めないということだった。ぼくの食生活のことは誰も知らない。なるほど、人間は食べるために生きている。だから食べることが苦痛な人間があるとは思わないのだ。だからぼくはこの苦痛を誰にも言わないのだ。

なぜ苦痛なの？なに、簡単なことだよ。物理的な問題でね。精神的なことは・・・まあ少しはあるかもしれないね。でも基本的には全部この骨が悪いんだ。ちょっと臓器に優しくなくてね。こんな固いものと柔らかいものが、この小さい体の中でごちゃごちゃと共同生活しているんだから、ストレスもたまるはずさ。で、真ん中を貫いているこのバックボーンで奴が生まれつきの暴君だったのさ。きみも、もし座高が異様に高かったりしたら、すぐに横からレントゲンを撮ってもらいな。いや、医学的なことはさっぱり知らないんだけどね。でもそういうことなんだ。治りようがないんだから、こんなことは考えてもらちが明かない。それに、体質的不利ってのは誰にでもあるものじゃないか。おまえより苦しい状況に置かれている人たちだっていくらでもいるじゃないか。今でも中東では紛争が絶えぬというのに、飢えに苦しんでいる子どもたちがいるというのに、何だ、貴様は、「胸が痛む」だと！「寂しい」だと！贅沢だ、贅沢病だ！しかしこういう無敵の反対意見というのは、ますます彼を責め立てた。個人の健康をないがしろにして、なぜ全体の健康を実現できようかという、若造の出過ぎた考えは、聞き流されてしまった。彼は心の中で繰り返した。「ぼくは身体が弱くなっているような気がします、食事中に胸のあたりに違和感があります、一人でいると不安になります」。すると、偉大なる先輩たちは言うのである。「気がするだけだよ」「実家に帰りなよ」「医者に行けよ」「知らないよ」「関係ないよ」「こっちは忙しいんだよ」「おまえの悩みを聞くことの意味がわからない」「死にたいなら死ね」「気にしすぎだよ。まったく・・・地震で家族や仕事や家をなくした人が大勢いるのに・・・勉強が辛いからって卑怯な嘘をつきやがって・・・お前の悩みなど・・・くだらない・・・なさない・・・ばかばかしい・・・弱々しい・・・おれなんかな・・・あいつなんかな・・・ぶつぶつ」

彼は正気になった。退室時間が迫っていた。しかしまだ昼だった。延長して留まっていることもできた。しかし店員と言葉を交わすのが辛かったので、時間通りに出た。

移動の速さと思考の深さは反比例した。停止しているときより歩いているときの方がましで、高速で走っているときはいくらか思索過剰も和らいだ。つまり前に向かってどんどん進むほど停止に近づいているということだった。にもかかわらず、やはり記憶の退行は進み、それは文字通りの帰郷とは正比例していた。実際彼は故郷に近づいていた。それは何か特別な愛着に引き寄せられているのではなくて、ただその道を覚えているからだった。まっすぐに開けた国道をひたすら進み続けるには、最低限の注意しか必要としなかった。

二日目の夜は北区まで進んで、滝野川という地区で止まった。降りて数歩で彼はさらに数ヶ月遡った。桜はまだ咲いていなかった。彼はその頃すでに絶食し始めていた。主食というものは存在しなかった。生活費は充分あったにも拘わらず、食べ物にはほとんど金を使わなかった。といって何かに浪費していたわけでもない。親から送られてくる金を使うのが申し訳なかった。

頭は働かなくなっていた。大事な提出物があるのに、いっこうに進んでいなかった。そしてそれを出さねば来年卒業できなくなることを知っていた。それが親に更なる金銭の負担をかけることを思うと胸がつぶれた。しかし焦るほどに食物は喉を通らず身体は衰えていった。そして彼は人間が一日一食でもやっていけることを知った。ときおり発作的に、賞味期限の切れたパンを食することもあったが、怠けていた内臓は驚いて反発したため、半分ほどは吐いてしまっていた。それでも、そういった臨界点に餓死を免れる本能が働くことを知ってしまうと、彼はますます積極的に食事の量を減らしていくのだった。

当然、熱量を必要とする勉強は全く進まなかった。生活そのものがのろくなった。一日の半分は寝ていた。あとの半分はほとんど家事と部屋の掃除と、ほんのわずかの読書に潰えた。積極的な活動はほとんどできなかった。彼の住んでいたマンションは、すぐ近くに安食堂とコンビニエンスがあるので、必需品調達のために体力が尽きることはなかった。

徐々に徐々に、身体は不調を訴え始めた。筋肉は重くなり、少しの動きですぐに痙攣を起こした。めまいが止むことはなかった。わけもなくいらいらし、不安になった。夜は眠られなくなった。絶えず胃の中の空気が逆流し、胃酸が舌の奥までやってきた。爪はなかなか伸びなくなった。頬はこけてきた。ベルトをいっぱいにしめてもジーンズはずり落ちた。便は出なくなった。体温と血圧は低下し、朝目が覚めても、身体を起こすまでに数時間かかった。その間、金縛りにかかったように、固まった身体を動かそうともがき続け、頭の中では悪い考えがぐるぐる回っていた。長く辛い孤独から抜け出すためにどうしたらよいかという問いと、それに対する悪い答え。まだそれが常識的に悪いと考えることができていた。錯乱は始まったばかりだった。

にわかには答えは重みを増してきた。そのために、卒業論文計画書のことなどまったく手に付かなかった。しかし結局、優等生の習慣が反発して、彼を机に向かわせた。だが一日二日でまとめられる代物ではなかった。彼の性格では、この計画書を仕上げるのに、文献探しだけでも二三週間は必要だった。予習読書のためにさらにもう二三週間必要だった。しかし時間の感覚も、自己管理をする気力も、彼から失われつつあった。作業は進まなかった。

締め切り一日前、彼は全精力を振り絞って机に向かった。机に向かいさえすればなんとかなる、とどこかで思っていた。そんなはずはなかった。結局彼は何も書けなかった。絶望と自己嫌悪と強烈な罪悪感とで、彼は目の前が真っ暗になった。せめて、あと一週間、いや、五日でもあれば、準備をしたふりをしてでっちあげることもできなくもないのに。しかし、そんなことを思っても無駄だった。立ち上がるとめまいがした。めまいはやまず、彼は倒れた。しかし倒れたのは彼だけではなかった。テレビ、スタンド、本棚、冷蔵庫、電子レンジ、あらゆる家具が床に落ちてきた。自分の内部崩壊が外の世界と呼応して、全てが崩れ去っていくことを感じた。

しかしそれは体調不良による幻覚などではなかった。彼が全てを諦めて投げだそうとした瞬間、あの二〇一一年三月の大地震が起きたのだった。彼は着替えもせず、靴も履かずに外に出た。通りで人が大騒ぎしていた。七階建てのマンションは横におおきく揺れ、薄っぺらい彼の身体は手すりから下に投げ出されてしまいそうだった。恐怖が実感を伴ってきたとき、彼の足はほとんど自動的に階段を駆け下りていた。極度の不安と緊張状態により、心臓に大きな負担がかかった。そのときのショックはすさまじく、彼はのちに不整脈になった。

それから、混乱した頭を地面に放り出してしまわぬように、よたよた歩きながら駅まで向かった。大混乱だった。自分が揺れているのか、地面が揺れているのか、全くわからなかった。携帯電話を使う人々は、回線が混雑していることを嘆いていた。電車が止まり、帰れなくなって、途方に暮れている人々が冷たい地面に座り込んでいた。タクシーの前に長大な列ができていた。道路は混雑し、車より徒歩の方がよっぽど早かった。混沌の渦に飲まれ、彼は歩けなくなった。緊急閉店したファーストフード店の前の、冷たい銀色の丸テーブルを見つけ、椅子に身を預けた。彼は半覚醒状態で、わけもわからずに目の前の非常事態を眺めていた。一体何が起ったのだろう。ぼくが計画書を書けずに、時間がもう少し、もう少しだけあれば、と悲痛な思いを抱いているとき、何が起ったのだろう。苦しいのはぼくだけでよいはずなのに、混乱するのはぼくだけでよいはずなのに、崩壊するのはぼくだけのはずなのに、なぜ幸せなみんなが、あんなに大慌てしなければならないのだろう。ぼくのせいなのか。大地震？ぼくが引き起こしたのか。そんなばかげたこと、あるはずがない。それに、締め切りは変わらない。もう机に戻ることもなんかできやしない。ぼくは終りだ。

彼は寒さに耐えきれずに、帰巢本能に従っていた。マンションには入れた。まだ揺れていたが、彼は既に諦めていた。このまま崩れ落ちようが構わなかった。何か不思議な、超然とした気持ちになっていて、大きな余震が来ても妙に落ち着いていた。何もかもを受け入れる覚悟だった。およそ考えられぬ偶然が起きたのだ。これはまさに千年に一度あるかないかの自然災害だ。それが卒業に必要な勉強を中断したのだ。もう、諦めるしかない。

それから翌朝まで、テレビにかじりついていて。がれきの街、火災の浸食、駅に座り込む帰宅難民者・・・同時代的に体験した初めての歴史的な大災害だった。免疫のない彼は、現実を容易に受け入れることはできなかった。報道される死者数は、毎時間ごとに百人単位で増えていった。老若男女問わず、罪無き命幾千が一瞬で消え去った。家族はばらばらに引き裂かれた。彼は、たとえどんなに善良であろうと、どんなにほほえましく、愛らしく、優しくてけなげな、教訓に満ちた生活を送っていたとしても、何ら合理的な救いも恩賞も与えられずに、ただ無残な破壊のみが与えられた人々の苦しみを思うと、心臓を吐き出しそうになった。

そして数日後、大地震の影響で、卒業論文計画書の提出期限が半月延びたことを大学から知らされた。災害が自分に有利な状況をもたらしたという事実を知って、彼は発狂した。あの時自分は、何か特別な事態が発生して、提出の遅延が許されるようになることを、少しでも期待してはいなかったと、自信を持って言い切れるか。締め切り延長が告げられたのは知っていましたが、当時はもうわけもわからず、災害の事で胸がいっぱいで、自分の絶望的な状況に余裕ができたことに安堵するどころではありませんでしたなどと、しゃあしゃあと言訳している自分が見えた。地震のおかげで卒業できることになるのだ。こういった紛れもない事実を言語化してしまったことで、罪悪が彼の心を覆い尽くし、もはや彼は人の顔も目もまともに見ることはできなくなった。全て自分のせいなのだ。自分が引き起こしたことなのだ。自分が数万もの罪無き命を奪ったのだ。そして誰も自分の罪を知らないのだ！それから彼は、米とパンを一切食べなくなった。混乱した市民によって店の棚からは食料品が消えていき、がらんとしていたが、彼には買い占める権利など当然なかったのも、不満などあるはずもなかった。

それから彼の心臓は正常に働かなくなった。動悸が止むことはなかった。人の声を聞くだけで吐き気を催した。電車やバスなど、公共の乗り物には乗れなくなった。もはや彼の生きる目的は一つしかなかった。それは卒業論文を仕上げることであった。被災地に乗り込んで働きたい衝動を抑えるのは、ほとんど至難の業だった。しかし、病弱な自分が行ったところで、何の役にも立たないどころか、かえって迷惑でしかないことに気付くのに時間はかからなかった。結局、学業の修了という極めて個人的な問題のためにしか動くことは許されなかった。このために愚かな自分は生き残り、心豊かな数万人は死んだのだ。なんと理不尽なことだろう！彼はこれを書き上げるために全力を尽くすだろう。しかし、その後は・・・？

その後が今だった。三日目の夜が始まった。自分はどこから来て、どこへ行くのだろうか？一日前にはたぶん具体的なことも知っていた。しかし今は哲学的な問題になってしまっていた。戻ろう、という気持ちはかろうじて覚えていた。戻るんだ。今までの道を。まだ、やり直せるかもしれないんだ。しかし待てよ、今までの道とは何だ？この大きく開けたまっすぐな一本道のことだ。確実に危険の少ない代わりに退屈な。どこまでも戻っていけばどこかにたどり着くはずなのだ。自分だってどこかにいたのだ。誰だってどこかで生まれたんだし、どこかにいなくちゃいけないはずなんだ。自分のいた場所がどこかにあったはずなのだ。彼は、どこにもいない人間とは、つまりどこにでも存在し得る人間だと思って、そのために自分をいかに生きたまま世界から排するかということに一生懸命になっていた。しかしやはり、どこにもいない人間とは、死んだ人間のことだ。生きている人間ならば、必ずどこかにいるのだ。

しかし誰も常に移動している、と彼は次に走り出すと即座に思った。そうだ、誰もが移動している。一カ所に留まっていることはできないのだ。だから一見、どこにもいないように見える。どこにも出現し得るように思える。しかし彼らのいた空間が移動するわけではないのだ。移動するのは彼ら自体なのだ。残された空間は、静かに、ひっそり忘れられ、われわれが死んだ後もずっとそこにあるのだ。やがてわれわれがいた痕跡も残らず消えて、そこにいた人間に関する記憶まで、人々の頭から消え去っていくのだ。いなくなった人間のことを、われわれはただ、まあどこかで生きているのだろうな、という漠然とした思いを頼りにして、振り返ることをしないで済ますことができるのだ。いなくなった人間を本当に思うことができるのは、その人が死んだことを確実に知ったときだけだ。その時にこそ彼はもう一度皆の記憶に蘇り、生命の輝きを取り戻すことができるのだ。それは新たな誕生であるから、つまり人は皆二度生きて、二度死ぬというわけだ。ただ自分自身の記憶の中では、一度しか生きられず、死などはただ予感することを許されるのみであるから、恐らく一度もないのだ。いずれにせよ三度目を当てにしていけない。そうだ、だから自分は一度目からずっと正直者で在り続けてきたはずだ。

だが自分には移動は苦痛なのだ、と彼は思う。怠けたいというわけではない。しかし彼はどこにいくにも、歩いてはいけなかった。いつも走らなければならなかった。自転車で何分も走らなければ駅には行けなかった。高校生になると、友だちはみんなバイクの免許を取り出したので、彼もとらなければならなかった。バイクは怖いから乗りたくなかったけれど、乗らないと遅れてしまう。彼が育った家は田舎にあるのではない。田んぼや畑や牧場や工場が腐るほどあるけれど、また飛行場や球場やモーターコースやゴルフ場まであるけれど、それだけでは田舎というわけではない。国道も産業道路も通っているし、都心まで一時間で到着する電車も通っているし、市内を巡るバスもある。だから、駅から離れたところの、どんなに開けた、閑散とした、寂しい、四六時中カラスが鳴き止むことのない、枯れ木だらけの広大な農業地帯に住んでいたって、早起きして駅までガソリンを使い、満員電車で揺られれば、都心の学校にも通えたのである。つまり田舎であって田舎ではないという、典型的なベッドタウンである。けれどもそれが便利とは、決して思えなかった。なるほどそれは、剛胆な気骨と持久力が自慢の田舎ものにとっては、耐え難い試練ではないかもしれぬ。しかし、全ての田舎ものがそうというわけではなかった。目的地にたどり着くまでに経ねばならぬ大変な手間の数々は、着実に彼の心身を蝕んでいった。なぜ、こう毎日、奴隷のように鉄の箱に詰め込まれて、こんなに冷たい顔をした、身体の大きな人たちに押しつぶされ（彼の身体は小さかった）、一時間以上吐き気を耐えてからでないと、学校に行つてはいけないのか。しかも自分は、それよりも前に、あの恐ろしい鉄の塊と並んでひやひやしながら車輪を走らせて、さらに駐輪場からも走って、走って、駅の階段を上って、また走って、へとへとになっているのだ。しかしこういう主張も、おまえよりももっと遠くから、もっと時間をかけて通学している人がいるんだよ、という最強の反論によって覆された。だから彼は、そういう人はぼくと同じ体質か、同じ足の長さか、同じ体力か、同じ服を着て同じ食事をして同じ学校に通って同じ部活動をして同じ量の勉強をしているのか、同じお父さんお母さんお兄ちゃんと同じ家に住んでいるのか、いやあり得ない、などと考えることはできても、口に出して訴えることなど許されなかった。彼は、こういった事情から、生涯一度も塾や習い事に通うことがなかった。それは、特殊な勉強のために親に高い金を払わせなくて済むという安心を彼に与えはしたが、励み合う友だちは一人もできなかった。

大学生になっても、やはり親しい友だちはいなかった。

しかし、例の救急車騒動の後、様子がおかしいらしいというので、彼を知るごく少数の学生たちの間では、いきおいあまって生じた善良な義務感から、ちょっとした会議が開かれた。教授から聞いた話じゃ、学内で倒れて運ばれたらしいが、何の病気だか、知っている奴はいるか、同じ講義をとっている奴はいるか、最近学校に来ているのを見た奴はいるか、彼が不健康そうなこと、どうして誰も気付かなかったのか、そもそも連絡先を知っている奴はいるのか、どこに住んでいるのか、一人暮らしか、云々。もちろん彼らは何一つ知らなかった。で、そのうちクラブ活動とか文化祭準備とかアルバイトが忙しいというので、会議は自然お流れとなった。結局、学事センターに軽い報告をすると、彼らの良心はすっかり満足した。事務員によると、彼の卒論はちゃんと期日通りに提出されているということで、じゃあまったく問題ないのだな、ということになった。よしんば健康問題深刻につき相談すらできないのだとしても、まあ誰かが助けてやるんだろうな、お節介はよくないわ、という感想発表が会合を締めくくった。

彼はまさに卒論を提出して、今はその帰り道のはずだった。しかしもはや帰る場所などなかった。彼は二輪車を走らせている。右側を大型トラックが走っている。夜はトラックが多いのだ。追い抜きされるのは、いつだってひやひやするし、なぜだか申し訳ない気持ちになる。しかし彼は思う。こんな切ない思いをするのも、たぶんこれで最後かもしれない。もう後ろからすごい勢いで迫ってくる自動車を気にしてびくびくすることも、黄色信号で律儀に止まってプツプツされることも、でこぼこした路側帯を無理に通って渋滞をすり抜けることもしなくていいんだ。そう思っても、感慨深いものは何もなかった。ただもう、安堵と開放感で胸がいっぱいになった。

こうやって真っ直ぐ真っ直ぐ走り続けていればいいんだ。特別な注意力も判断力もいらない。脇見をしちゃいけない。ひたすら真っ直ぐ走って・・・走って？ぼくは走っているのか？二輪車を走らせているのはぼくだ。でも、ぼくを運んでいるのは二輪車だ。二輪車が進むのはぼくが乗っているからだけど、ぼくは座っているだけだ。ぼくはただガソリンを入れたタンクの上に座っているだけだ。ぼくは運ばれているんだ。ぼくの意志はどこにあるんだ。二輪車が進むのはぼくの意志だ。ぼくは、周りの車の邪魔にならないように気をつけているから真っ直ぐに走っている。ずっとそうしてきたんだ。だがそれは意志なのか？余計な心配をかけたくない。だからいつも周りを気にしている。だけどぼくは？ぼくを気にしてくれる人はいるのか？ぼくを見ている人はいるのか？みんなぼくのことなんか知らんぷりして、あんなに速く走ったり、追い越したり追い抜いたり、右折したり左折したり転回したりしている。ぼくのことなんか誰も気にしちゃいない。畜生、見てろ、ぼくだって曲がれるんだ。ぼくがハンドルを曲げれば、車輪は曲がるんだ。あの脇道を左に曲がることだって、その先の交差点を信号無視して突っ走ることだってできるんだ。見てろ、見てろよ。ぼくにだって意志はあるんだ。見てろ。

しかしやっぱり彼は真っ直ぐに走っていた。いつまでもいつまでも真っ直ぐに走っていた。予定外のハンドル操作を決行する勇気はなかった。ひとたび道を外れれば、すぐに未知と不安と危険に溢れた迷路に入り込むかもしれない。そうしたら、もう出られないかもしれない。しかし、今更なんだ？出られなくなったって、誰もぼくのことを探しに来やしない。だったら、いいじゃないか。もう曲がっても、いいじゃないか？

事実彼は道を踏み外していた。最初から正しい道などなかったのだ。ただ誰もが通るからというだけの理由で、平坦で単調な国道を選んだ。しかしそれからは何も選ばなかった。それがつまり崩壊の始まりだった。迷うこともなく、止まるべき場所は予め示されていて、考えることは必要なかった。そこには発見も成長もなかった。何もかも整えられていた。彼の人生は彼の手の中にはなかった。彼は真っ直ぐに進み始めたとき既に停止していた。しかし新しい道を選ぶためにはどこかに衝突せねばならなかった。何かルールを破らねばならなかった。しかし彼にはできなかった。親とも友達とも衝突したくなかった。自分が優等生を演じて、誰も傷つかずに済むのだったら、ずっとそうしていればいいと思った。退屈かどうかとか、自由意志がどうかとか、個性がどうかとかいうことは考えてはならなかった。問題を起こすことだけはしたくなかった。そして彼にとっては、宿題を一日分忘れるだけのことが、退学や家庭崩壊を引き起こすほどの大問題に思われた。

受験勉強をはじめたときには、もう勢いがついてしまっていた。受験生というのは、この世で一番楽な職業だった。勉強だけしていれば、完璧に体面を保つことができるのだ。そして、勉強は先生が教えてくれるのだ！ただ机に座って暗記をしているだけで、朝昼晩とたらふく食って、夜は暖かい布団で寝ることができるのだ。親はいつになく優しくなり、ねだってもいないのに、たまの息抜きにと、漫画本を買ってくれたりした。その時も彼は申し訳ない気持ちになった。これじゃあまるで確信犯だ！親というのは、遊んでいれば勉強しなさいと言い、勉強していれば遊びなさいと言うのだ。もちろん勉強ばかりしていた彼は、ほとんど小遣いを使いもせず、漫画やゲームを手に入れた。しかも、親に対する申し訳なさから、また休んでいることをわざわざ演出したい気持ちから、それらを残らず遊び尽くさねばならなかった！また、プライバシーがどうのと騒ぎ立て、ノックせずに自室に入られることを拒否することなど、あり得なかった。むしろどんどん入って下さいという思いで、部屋のドアはいつも開けていた。閉めていても、いつでも好き勝手に部屋に入ってきてもらって構わなかった。学校に行っているときに、勝手に部屋に入って掃除され、家具や置物の位置が変わっていたとしても、何とも思わないどころか、もっと部屋を漁り回ってもらって、いかがわしいものなど何もないところを見てほしかった。しかし、ああ、彼の親は出来のいい息子に安心仕切って、放っておいたのだ！彼は、ほとんど文句らしい文句も言わず、反抗などせず、やれと言わずとも勉強し、部屋は散らかさず、夜更かしはせず、朝寝坊はせず、ばかに手間のかかる通学手段にも耐え、高熱が出ても、怪我をしても、隠し通して、学校は絶対に休まなかった！だから、彼が大学に入学し、ひとり東京で暮らすことになっても、親はそれほど心配しなかった。彼は週に一度は電話をし、自分が元気であることを報告した。しかし、電話など、意識さえあればできるのだ。カッターを腕に当てていても、壁を頭にぶつけて血を流していても「元気だよ」と言うことはできるのだ。その一言で、すべて事足りるのだ！だから彼の孤独は、誰にも親にさえも気付かれなかった。

彼よりも十年も前に生まれた兄が、できそこないだったので、親は余計に彼をかわいがった。兄の方は、全く勉強などせず、毎日夜遊びや非行に耽っていた。それで、父親との喧嘩は絶えなかった。怒鳴りあい、殴り合い、廊下には血が飛び散った。壁には穴が開いた。電球は落ちて割れた。花瓶は吹っ飛ばされた。そして、夜ごと繰り返されるそういった暴力沙汰に怯えているとき、彼はまだ十歳にも満たなかった！彼はそのときから眠られなくなった。眠られても、悪夢を見るようになった。父と兄が喧嘩しているとき、彼は二階の真っ暗な部屋で、眠ったふりをしていた。しかし、テレビは消さずにいた。もしかしたら、自分が眠られずにいることに気付いてくれるかもしれぬと思っていたのだ。しかし、母親でさえ気付かなかった！その時テレビは『リトル・マーメイド』を放送していた。しかし彼は内容を覚えていない。それ以来、アリエルを見ると辛い気分になった。

喧嘩が終わると、兄は借金して買ったぼろい外車で夜遊びに出るか、そうでなければ部屋に引きこもった。しかし、兄はまだ寝ないのだ。そして、兄の部屋は、彼の部屋の真下に位置していた！彼は、兄が何分も狂ったようにぶつぶつと暴言を吐いた後、うるさい音楽を大音量で掛けるのを、上で聞いていて、寝付けなかった。また、暴力的なテレビゲームを始めたりした。どうしてそういうことがわかるかというと、兄は夜な夜な弟の部屋に忍び込んで、ゲーム機を乱暴にひったくっていくからだ。そう、ゲーム機はもともと、親が弟に買って上げたものだったのだ（兄はそれを知ると、いつの間にか残虐なゲームソフトをどこかから仕入れてきた）。しかし、それを一番楽しんでいるのは兄なのだ！兄が何時間もぶっ通しでゲームをするので、機械はめちゃくちゃに熱くなって、壊れてしまうかもしれないと思った。そうすると、所有者である弟が怒られることになるかもしれないので、彼は毎日、兄の部屋から機械を取り戻さねばならなかった。そこは、煙草と、酒と、スプレーと、シンナーと、甘ったるい香水のにおいが交じった不潔な空気が充満していて、吐き気を催さずにはいられなかった。いっそ、ゲーム機は兄にあげてしまいたかった。しかし彼には、兄と言葉を交わす勇気さえなかった。十年も年が離れていたら、ほとんど他人なのだ。そして、彼が小学校高学年にもなると、兄は家を出てどこかに行ってしまった。で、それから彼は一人っ子同然だった。ときどき兄は侵略者のように家に戻ってきては、嵐を起こし、爪痕を残しては出て行った。その間隔もだんだん長くなっていった、彼が中学に上がる頃には、兄は全く家に帰らなくなった。

もちろん、こういう苦い思い出は誰にでもあるものですよと言うわけで、彼はいちいち慰めてもらうことを我慢した。辛い過去を誰かに話して同情してもらうことが恥ずかしかったのではない。ただ自分の辛い思いを他人に共有してもらおうというのが、押しつけがましく、傲慢に思えたので、どうしてもできなかった。何度も何度も話そうとしたが、ついにできなかった。友だちを暗い気持ちにさせたくはなかった。何気ない会話の中で、それとなく、辛かったということを匂わせてみたこともあったけれど、しかしそういうほのめかしというのは、メロドラマや小説とは違って、気付かれることはないのだった！彼ほどの優等生は、誰よりも温かい家庭に育っているとしか思われなかった！親にさえ話せなかった。いや、親にこそ話せなかった！終始、孤独を感じていないふりをした。何も気にしていないふりをして繕った。そういうとき彼は気丈だった！崩れ落ちて抱きつきたい思いをぐっとぐっところえていた！部屋に戻ると、目頭が一気に熱くなって、人知れず何時間もすすり泣いた！しかも彼は、異常なまで神経質で、涙を流しているところを、決して見せないように取りはからうことができた！絶対にばれない時間帯を狙って、絶望に浸った。親の前で悲しい顔をしようものなら、自殺した方がましだった。当然心の傷は深く残って、いつまでも治らなかった。

傷は新たな傷によって上書きされていった。彼は、思春期を迎える頃には、孤独の悪魔に魂を売り渡してしまっていた。彼は愛する集団の中にいてさえ、やはり一人だった。友だちは、彼のノートを目当てに彼と親しくしてくれた。時には、わくわくするような遊びに誘ってくれることもあった。しかし、あわれな彼は断って帰らねばならなかった。家が遠いのだ！帰宅にかかる手間と体力のことを考えれば、遅くまで遊んでなどいられなかった。それに彼は勉強せねばならなかった。塾に通わずに、自分の部屋だけで勉強せねばならなかった。それはもちろん塾生より時間がかかった。よくできたテキストなどは持っていなかった。彼は誰よりも暗記せねばついていけなかった。しかも、そうしなければ友だちも寄ってこなかった。彼は、勉強などほったらかしの友だちのためにすら勉強していた！ただ一言、「ノート貸してくれよ」と声を掛けてもらうために！ああ、彼は友だちが欲しかったのだ！

当然ながら、勉強だけが全てではないということも、例の偉大なる先輩たちは教えてくれた。しかし、期待も安心も承認も、結局勉強だけによって得られた。だからますます彼は勉強した。成績はいつも優秀だった。しかも彼はいばらないので、けっこう友だちも寄ってきた。しかし、容易にくつつくのは、個性がないから当たり前のことで、離れるのも一瞬のことだった。彼は常に「友だちの友だち」だった。彼を「自分の友だち」と認識するものは誰もいなかった。しかし悲しいかな、それはつまり、彼が目標にした「生きたままの自殺」、すなわち「他人の頭の中だけで生きる」ことの成功を意味していた。彼の生活は完全に停止していた。このとき彼はまだ十五歳だった。

しかし、幸福な瞬間もないわけではなかった。それは十二歳のときだった。小学校の最後の年に、彼は大好きな幼なじみの女の子と一緒にクラスになった。彼と彼女の家は、ぴったり背中合わせに建っていた。それぞれの玄関は反対方向を向いていて、どちらにも裏口はなかった。二人の家は団地に建っていて、周りにも三、四軒家があった。そして、彼の家は、大きな畑と金持ち老人の家に囲まれていたが、彼女の家は、子どもの多い中心部に位置していた。近所の友だちは、皆彼女の家がある方の団地に遊びに来ていた。彼だけが反対の方向を向いていた。彼はいつも家の中で一人、裏で遊ぶ友だちの声を聞いていた。裏の団地に住む同級生が楽しそうに遊んでいる声を。彼は遊びに参加することができなかった。仲間に入るためには、大きな畑を迂回するか、さもなければ二回の父の部屋から飛び降りるしかなかった。むろん彼にはそれができなかった。そこまでの勇気がなかった。しかし依然声は聞こえていた。彼は、自分は家にはいないのだと、自分自身に言い聞かせた。自分は別の友だちのところに遊びに行っているのだ。自分は自転車で走り回っているのだ。自分はいない。だからみんなとは遊べないのだ。だが彼の肉体はそこにあり続けた。しかも、友だちがみんないなくなった後も、例の女の子の声だけは聞こえていた。彼女が母親と口げんかしたり、父親にかわいがられたり、妹たちとじゃれあったりしている可愛い声が聞こえていた。彼にはそれが愛おしかった。身近に感じることのできる唯一の人だった。

しかし彼女の方は、いつも彼がいないように思えた。彼の声はほとんど聞こえなかった。彼の母が彼を呼ぶ声ならば何度も聞こえた。彼のお兄さんとお父さんの怒鳴り声や物の壊れる音ならば何度も聞こえた。しかし彼の声は聞こえないのだ。だから、彼は幽霊のように思えた。本当にそこに住んでいるのか、信じることはできなかった。だから彼女は、犬の散歩中に畑の周りを歩いているときに、彼の家の前に自転車があるのを確認しては、何だかほっとするのだった。ああ、やっぱりいるんだな。彼女は、七歳のときに彼の家の裏に引っ越してきた。まだ小さかったので、気恥ずかしくて挨拶はできなかった。彼女が病気で学校を休んだ時に、学校からもらうお手紙をまとめたファイルと、友だちからのメッセージを届けてくれたのは、いつも彼だった。家が一番近い人が届けることになっていたのだ。そこには、短いながらも、彼の言葉もあった。大抵の友だちは「早く元気になってね」としか書いていなかったけれど、彼は「休んでもよくがお手紙届けるから、安心してね」とか、ちょっと違うことを書いていた。彼のことを思うと、不思議な気持ちになった。いつも近くにいるようで、いつも遠いところにいるのだ。似たような環境で暮らしているのに、彼女より勉強はできるし、字はうまいし、絵はうまいし、要するに何でもできるのだ。それで塾にもお習字教室にも通っていないという。しかも、周りの男子のように、ぎゃあぎゃあわめいたり、いやらしい話で盛り上がったり、意味もなく女子に絡みついてぶったり蹴ったりしないのだ。落ち着いていて、大人びていて、たまに学校で見かけると、いつも一人ぼっちで、何か考え事をしているように見える。

彼女は、担任の先生が家庭訪問する日、学校の駐車場で先生を待っているとき、彼が校門の所にいるのが見えたので、なんとなく、カラスの鳴き真似をしてみせた。それは、彼女の特技だったのだ。彼は、明らかに彼女に気付いていたが、「カラスはどこにいるんだろう」とでも言いたげに、わざと空を見上げてきよろきよろしていた。彼がわざわざ、一瞬のくだらない遊びに付き合ってくれたのが、彼女には嬉しかった。にこにこ顔をしていたら、いつの間にか先生が来ていて、あなたよほど家庭訪問が楽しみだったのね、とか何とかほざかれた。でも、と彼女は思ったーカラスを探すふりなんかしないで、話しかけてくれれば、もっとよかったのに。彼は行ってしまった。どうせ同じところに帰るんだから、一緒に先生の車に乗ってもよかったのに。しかし彼女を乗せた先生の車は、彼を追い越していつてしまった。

彼女は一人で家にいると、よくピアノを弾いた。とにかく下手くそなので、親も妹もいないときにしか練習しなかった。しかし、一人だけいつも彼女の演奏を聴いている人物がいた。彼は、裏の家から流れてくるこの不器用なピアノの音を聴いていると、優しい気持ちになった。よく学校で一緒に合唱した『時の旅人』や『遠い日の歌』などを、何度も同じところでつかえつかえしながら、一生懸命弾いている彼女の姿を想像すると、幸せな気持ちになった。彼のクラスはその年、校内合唱コンクールで優勝して、市内音楽会に出場したのだった。彼と彼女は、背丈が同じくらいで、二人ともアルトの担当だったので、歌う位置が近かった。だから彼は、コンクールの練習が終わって欲しくなかった。本番の日、市民ホールの控え室で、整列して待っているとき、彼女は彼の隣で、緊張してぶるぶる震えていた。彼も緊張していたけれど、隣にいる彼女の不安が伝わってきた。でも彼は、遠慮して一言も声をかけられなかった。彼はこのことを一生後悔した。

彼はそれから、このピアノの音を聴くためだけに生きているのだと思った。音が聞こえているときだけは、自分一人ではないのだ、と思えた。もちろん、このことは彼だけの秘密だった。自分がこっそり、というか嫌でも聞こえてくる彼女のピアノの音を聴いている（全然嫌ではないが）ということは、絶対に彼女に打ち明けなかった。家が近いからしやうがないとはいえ、盗み聞きと思われなくもないのだ。それに、あちらの音が聞こえるということは、当然こちらの音も聞こえているのだ。こちら側の、例の激しい親子げんかだって、聞こえているに違いないのだ。そう思うと、恥ずかしくなって、ますます彼女に対する遠慮の気持ちは大きくなった。

何もかもは遠慮だった。彼は何をすることも申し訳なさを感じた。いつも自分が悪いと思うのだった。例の行動方針を決めてしまう前から、彼は、今の子どもは贅沢で、甘えん坊で、恩知らずで、勉強不足で、頭が悪いだのゆとり教育の被害者だのと言われていて、それを当然のように受け入れた。自分は不便な田舎に住んでいて、大して裕福でもないけれど、それでも食べるものに事欠くことはないし、暖かい布団で寝られるし、冷房も暖房もあるし、漫画だって、ゲームだってある。先生は、世の中には親のいない子どもとか、学校にいけない子どもとか、家がなかったり、手や足がなかったり、病気ですぐに死んでしまう子どもがいるとか言って、彼や彼らの友だちの贅沢生活を批判した。で、彼は、自分の不幸などわけないものだということを、そのまま理解した。しかし不幸は不幸に違いなかった。そしてその不幸は彼だけのものだった。教科書にも載っていない、新聞にも載っていない、テレビでも放送されない、彼の心の中にしかないものだった。それに、不幸を更なる不幸と比べても、きりがなかった。彼は、自分より遙かに幸せそうな環境で暮らしている人も、不幸を感じることはあるし、また、自分より明らかに不条理な生活を強制されている人の中にも、けっこう幸せそうに生きている人があることも知っていた。だから、個人個人が幸せとか不幸とかを裁断しあう基であるところの、住んでいる土地や家や親や容姿の美しさやおもちゃや洋服や学力や通学時間やお金の問題などの、生活の外面的な要素をいちいち比べることは、無意味なことだと知った。幸せだと思えば幸せだし、不幸せだと思えば不幸せだとかいう、いわゆる「気持ちの問題」という観念が、あながち間違っていないことを知った。

しかし、「気持ちの問題」が王様になって、何もかも「気持ちの問題」で片付けられてしまった！どうだろう、もし彼が、自分の一生の孤独を打ち明けていたら、心の病的なことを相談していたら、神経衰弱でほとんど死にかけていることを話したら、誰か、何の独善的説教もなしに彼の苦しみを理解し、二十四時間そばにいて、彼を抱きしめてくれる人がいたろうか？「病は気から」などという便利な逃げ口上を一度も使わない友だちや先生があつたろうか？いない！彼らは言うだろう！「気持ちの問題」なのだからと！それに、あなたの身体は何ともない、別に白血病や癌というわけではない、今までだってなんともなかったのだから、何も気にすることはないだろうと！きっと寂しいのよ、人の気が惹きたいからあんなこと言うのよ、勉強のしすぎなのよ、友だちがいないのよ、気むずかし屋さんなのよ、相手にしない方がいいわよ、親御さんが面倒見てくれるわよ、きっと誰かが助けるわよ、別に今すぐ死ぬわけじゃなし、と！どうしてそんなことがわかる？そもそも、例の偉大なる先輩たちが、彼の何を知っている？ついに、彼は最後まで優等生だった。およそ反抗心などかけらも見せぬ、無口の、怒ることを知らぬ、ばか正直の、従順な愚か者は、自分の本心から声を発する力を失っていたのだ。彼は話せなかったのだ！

三日目の夜も更けていた。彼は、懐かしい景色と見知らぬ景色が一辺に目の前に広がってきて、変な気分になった。自分が走っている大きな道路の脇に、見覚えのある家が一軒あった。それは確かに自分の知っている家だった。かつて学校帰りに、毎日のように通り過ぎた家。それがなぜか、自分の全く知らぬ空間にぽつんと投入されているのだ。そこにはないはずのものがあつたのだ。一瞬彼は、ついに幻覚が見えるまで疲労したかと思った。しかし、彼は気付いた。その家が間違つた場所に現れたのではない。家の周りの風景が悉く変わってしまったのだ。かつてそこには住宅地があつた。そしてその家だけが、公的な建設計画による排外を免れる位置に建っていたのだつた。今彼が走っている道路をつくるために、そこにあつた家々は一つを残して全て壊された。その住宅地には、彼の小学生時代の友だちの家があつたはずだ。彼はたったいま、かつて友だちが暮らしていた空間を、彼らが地面に落ちた銀杏をぶつけあつて遊んでいた空間を、貫いていったのだ。

彼は、地元に着いてしまったことに気づき、ついに国道を降りて、見覚えのある開けた農業地帯までバイクを走らせた。ああ、ここは、白山公園の近くだ。この公園は、彼がまだ幸福だった時代、短い幼年時代をよく過ごした公園である。母に連れられて無邪気に走り回つた公園である。彼の記憶は鈍く痛み出した。知らず知らずのうちに、公園の駐車場に向かつていた。駐車場の裏に、あの小さな市民プールがあるのだ。

彼は思い出していた。たった一度だけ、裏の団地に住む同級生やお兄ちゃんたちに誘われて、そのプールに遊びに行ったことがあることを。仲間の中には、あの女の子もいた。彼は顔を真っ赤に染めながら、一緒に自転車を走らせ、彼女についていった。受付には小学生が行列を作っていた。脱衣所の床は垢だらけでぬるぬるして、かびくさい匂いがした。プール場の外周は角形の植え込みに囲まれていて、その辺りでは、とかげが出るぞとか蜂が出るぞとか言つて、泳げないほらふきどもが女子を脅かしていた。ヨット型に刈り込まれた植木もいくつかあつて、子どもたちの目を愉しませてくれた。敷き詰められたアスファルトのタイルの間から生えている雑草が足にちくちく触つた。走ると、監視台の上に座るお兄さんに赤いメガホンで怒鳴られた。冷たいコンクリートの階段を上つて、わくわくしながら並んだウォータースライダー。それは、都会の派手なものとは違って、高さ何十メートルもないちっぽけなものだった。彼は、女の子や他の仲間たちと一緒に、列に並んだ。頬がつるほど笑い合つて、体中の筋肉が痛くなるまで、何度も何度も滑り降りた。疲れると、そばにあるベンチに座つて、ぜいぜいしながら、お互いの胸に手をあてたり、手首を握り合つたりして、心臓の脈打つ速さを比べ合つた。

あの美しいプールに、今近づいているのだ。彼は、故郷に戻ってきたのだ。辛い時代を過ごした故郷だけれど、まだ自分の心が戻ってこられる場所があったのだ。彼の心は、もうそこに飛んでいた。ブレーキを掛ける代わりに、アクセルを開きっぱなしにして、ひたすら真っ直ぐに走った。駐車場を突っ切ると、盛り上がった丘の上に、プール場の裏側の柵があった。

彼のバイクは柵を破れるほど重くはなかった。それでも、衝突の衝撃で柵はひしゃげて、彼の身体は吹っ飛ばされた。落下の衝撃で右肩が砕けた。それでも彼は立ち上がった。身体の痛みは、心の痛みと違って、すぐ治るものだ。心の痛みは、誰にも解らないものだ。

と、彼はおぼろげな意識の中で、そこが自分の知っているプールではないことに気付いた。水は黒く濁っていた。雑草はアスファルトのタイルを貫通していた。植木は枯れて焦げ茶色に変色していた。ベンチは錆び付いて、底は抜けていた。休憩所の屋根は剥がれ、骨組みだけが残っていた。スライダーには、雨よけの分厚い袋が被されていた。プールは、彼が故郷を去ってから、とっくに閉鎖されていたのだ。市は、財政難のために、プールを老朽化させるがままにしていた。修復もせず、壊しもせず。今はまるで、失われた文明の遺物のように、自然に浸食され、苔が生え、乾いた枝葉に包まれ、空間全体が大きな棺桶と化していた。時間は死んでいた。生きるものが侵入することは許されなかった。ここで遊んでいた子どもたちは、どこへ行ったのだろう！何をしているのだろう！

彼の足は止まらなかった。みんなと一緒に、何度も何度も駆け上ったあの冷たいコンクリートの階段を、また上り始めた。今彼は一人だった。いや、彼はずっと一人だった。どんよりと重い雲が空を覆っていた。星は一つも見えなかった。いつの間にか雪が降っていた。階段の頂上までたどり着くと、下には、スライダーから降りる子どもたちを受け止めた、小さくて浅いプールが、ぽっかりと口を開けていた。彼は既に、生まれる前まで遡っていた。意識はどこにもなかった。彼はこの世のどこにも存在しなかった。

彼以外のものには、はっきりとした、一切が夢の代わりに横たわる静かな雪の晩だった。彼自身が夢だった。今、温かい命を胸に抱いて、夢は暗い濁り水に溶けた。

ある優等生の自殺

<http://p.booklog.jp/book/45764>

著者：桜丘逢村

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/sakuraokahouson/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/45764>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/45764>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.